

紫式部

中納言兼輔かねすけの曾孫ひまご從五位下藤原為時ためときの女むすめ、母は摂津守たのぶ為信たけのぶの女むすめなり。右衛門権佐藤原

宣孝のぶたかの妻となりて二人の女を生めり。姉あねの賢子かたこは太宰大貳高階成章たかはしのなりあきとむの妻となりし故後

に大貳三位といひ、妹いもうとは弁局べんのつばねといひて後に後冷泉院ごれいぜいゐんの御乳母めのととなれり。

巡り逢ひて見しやそれとも分ぬ間に雲隠れにし夜半の月かな

新古今集*1雑上に早くより童友達わらはに侍りける人の、年頃経て行き逢ひたるがほのかにて、七月十日頃ふみづき

にきほひて帰り侍りければとあり。遙かに前かどより幼友達にてありたる人が、年数を経て後出で逢ひたるに確かにその人とも思ひ定めぬ間に、七月十日頃の夕月の隠るゝに劣らず、かの人も早く歸りたるを本意いなく思ひて詠みたる由なり。歌の心は月も空を巡りてはまた出づるものなるが、久しぶりにて巡り逢ひて顔を見たるは昔の友達なりし。その人かとも見分けぬ間に、雲に隠れたる今宵の月のやうに、早く歸りしその人の残り多きよといふ事なり。

紫式部の話*2

式部の夫は右衛門権佐藤原宣孝のぶたかといへり。*3長保三年四月二十五日宣孝卒せられて後再び他に嫁せず、

身を堅く持ちて後に上東門院*4に仕へ奉れり。この門院の女房達は皆歴々たる才女共なりしが、その中にてこの式部は才智ある顔持ちもせず、はなはだおとなしき人なりけれど学問は格別にすぐれられたり。その証は

寛治四年に上東門院また中宮と申し奉りし時、式部*5に白氏文集はくしぶんじふの*6樂府がふを習はせ給ひし事あり。その頃

門院*7の御父御堂関白道長公式部が夫に別れて後*8寡やもめながらに宮仕へするに、容儀麗はしく才智ある女なる

故度々たはぶれ言など宣ひけれど、品しなよくもてなして御心に従ふ事なかりし。さやうの事共は、かの式部*9の日記にきにてうかいひ知らるゝなり。*10寛弘六年の頃式部の作られし源氏物語、門院のお前にありけるを道

長公御覽ありて、例の御たはぶれ言ありしついでに梅の折枝に敷きてありし紙に御歌を書かせ給へり。

すきものと名にし立てれば見る人の折らで過ぐるはあらじとぞ思ふ^{*11}

この心は梅は味ひの酸きものなるを、好き者と通はせて紫式部源氏物語を作りて、色好みといふ名に立ちてあれば、見る人が梅を手折る如く式部をその儘に見過ごす事はあるまじと思ふとたはぶれ給ひしなり。さてこの返歌を式部の詠まれたるは、

人にまだ折られぬものを誰かこのすきものぞとはくちならしけん^{*12}

これはさやうに仰せらるれど、夫よりほかの人にはまだ手折られぬものを、誰か色好みなりと申しふらし候ぞといふ事なり。さてまたその頃式部渡殿にいねられし夜、戸を叩く人ありと聞きて居られたれど、恐ろしさに音もせずして夜を明かされたるに、その明くる朝道長公より遣されし歌、^{*13}

よもすがら水鶏よりけになくなくぞ槇の板戸を叩き佗びつる^{*14}

水鶏よりけにとは、水鶏よりまさる程にといふ事なり。この返しに式部、

たゞならじとばかり叩く水鶏故あけてはいかに悔やしからまし^{*15}

かやうに身を堅く持ちて操の正しき人にて、まことに才徳兼ね備はりたる女といふはこの紫式部なるべし。

さて紫式部といふ名の事は藤原為時の女なりし故始めは^{*16} 藤式部といひしを、源氏物語を作られし時、^{*17}

紫の上の事をすぐれて面白くもあはれにも書かれし故、彼かの上東門院の御殿にて藤式部といふ呼び名を^{*18}

改めて紫式部と号せられたるなり。又一条院源氏物語を覧ありて御称美の上、式部は日本紀をよく諳じ^{*19}

たる者なりと仰せられしより、左衛門内侍といふ官女が式部を日本紀の御局と申したる由なり。式部の父^{*20}

為時は藤原時郷の弟子にて名高き学者にして、歌をもよく詠まれし故式部も幼少の時より学問の志ありて、

兄の惟親史記を読まれし時も^{*21} 傍より見覚えてよく読まれたり。それ故父の為時申されけるは、この女男子^{*22}

にてあらましかば生長の後和漢の旧記にも涉り朝廷の故実にも通ずべきに、女にて本意^{ほんい}なしなど呶^{はな}かれしとぞ。式部寡になられし後も夫宣孝の残し置かれし書籍^{しよじやく}共を見てのみ月日を過ぎされし故、傍^{かたはら}の女共が婦人の御身にてかやうに學問を好ませ給ふ故、不幸にて早くやもめにならせられたるるべしなど密かにそしりたり。また箏^こをよく弾かれけるにや、千載集に上東門院に侍りける時、里に出でたりける頃女房の消息^{せうそく}のついでに、箏伝へにまうでんといひて侍りければ遣しけるといふ事書ありて式部の歌に、

*21

露繁き蓬がもとの虫の音を朧氣にてや人の尋ねん

とあり。これを見てもかの女房に、箏を教へられたる事の知らるゝなり。また日記^{*22}の中に箏^{そう}のこと^{わごん}和琴調^{わごん}べながら心にいれて、雨の降る日琴柱倒せなどいひ侍^{はんべ}らぬ儘になど書かれたり。

さて源氏物語を作られたる事は長保三年に夫宣孝に別れられてより後三四年ばかり、寡住みして

*23 ちやうほう

居^ゐられし時の事なるべし。無名抄^{*24 むみやうせう}の説に村上帝の御女、大齋院^{おほさいあん}より上東門院へ珍しき物語の侍^{さぶら}は、見

せさせ給へと請ひに遣されし時、門院式部を召して作らせられたる由いへり。またそのほか様々の趣意を立てて論ずれど、いづれも覺束なる説共なり。さてまた石山の観音に祈請して須磨・明石^{ふたまき}の両卷より書き始

*25

めたりともいひ、大般若經の料紙を本尊に申し受けて書きたりなどいふ説共も、名高き古人達の言ひ伝へたる事なれど用ひられぬ説々なり。また源氏物語を好色の書のやうに思ふは僻事^{ひがじと}なり。式部は前にもいふやうに才徳備りたる人なれば、種々様々の世間にありたる事共を収集めて人々の心得にも戒めにもなるべきやうに心を含みて書きたるものにて、まことに人情世態^{せいだい}を尽くしたる書き様なり。また文章に於いては古今

の名文たる事、今さらいふに及ばざるものなり。たゞしこの物語を好色の書とて賤しめ貶^{おと}しむる儒者の論共

*27

あれど、大意をうまく弁へぬ論共は取るべからず。熊沢氏の孝經外伝或問の説をこゝに挙ぐ。その説に

かうきやうぐわいでんわくもん

曰く源氏物語の好色の事は作り物語にして、いふ程の事は大方実事なり。昔の政^{まつりごと}の礼と樂との教へをの

み書ける書は、見る人少なきによりてつひには絶え失せたる書籍^{しよじやく}多し。好色は人情の好むもの故、表は色好み事を専らに書いて、内証には昔の礼樂風俗を後々までいひ残すやうに書かきたるものなり。色好み共の物語を釣糸にして古への遺風や礼樂のよき事を書き置かれし趣意をも知らずして、世間に源氏を読む人は

多くは好色の媒なかたちとなる事なり。源氏物語の实事は錦のやうなるものなり。世間の源氏を見る人はかの

綱*28 けいばかりを見てまことの錦を知らざる故、たゞ好色の書のやうにて主意を失ひて伝はれるは惜しき事なり。まづ神事祭礼の古法、葬式の服色の濃き薄き隔へだてのある事など詳しく記してあり。

またその時代の頭中将・源氏の大将は今の諸侯にくらぶれば中より上の大身なるに、かの頭中将と源氏の君と 同道して参内せらるゝとて、朝飯*29 こはいひに粥と強飯とを参る事あり。早朝の参内にて昼ならでは退出せられぬ故、粥ばかりにては堪へがたき故、力に強飯を参ると見えたり。源氏の君嵯峨へ行きて日を経給ふ時も、強飯より ほかは用ひられざりし様に書けり。これらの事にても上代の質素にして、清美なる風俗の知らるゝなり。また後世の 糸竹*30 いとたけの伝にも絶たる秘曲共、源氏物語にのみ留まりてある事も多しといへり。さてこの紫式部の女一人あり、名は賢子*31 かたこといへり。また和歌をよくして 狭衣*32 さじろもを著すなり。

『百人一首一夕話』(上) 尾崎雅嘉著・古川久校訂(一九七二年、岩波文庫 黄235-1)
三七二頁〜三七八頁二行目まで

【注】 ※注の翻訳は不要です。

*1 新古今集雑上／この歌の出典は、『新古今和歌集』雑部上一四九七番歌。『百人一首』は基本的に勅撰和歌集を出典とする。本文は、以下、「早くより」から「帰り侍りければ」までが、『新古今和歌集』の詞書。『新古今和歌集』では詞書から、幼友達と久しぶりに会ったが、慌ただしく、すぐにその友達が帰ってしまったことを名残惜しいと思う歌。ただし、『百人一首』には詞書はなく、歌一首をどう読むか、前歌(和泉式部の歌)などとの関係(歌の並び)から、どう解釈するかなど、詞書にとらわれない解釈が考えられよう。

*2 紫式部の話／以下の紫式部の伝記的な記述や『源氏物語』の成立などに関することは、『紫式部日記』や『源氏物語』の注釈書『河海抄』(室町時代初期成立、四辻善成著)、あるいはそれらを引用しつつ論を展開する安藤為章の『紫家七論』など先行する文献に拠っている。以下、個別にも指摘するが、全体としては、それぞれの原典にあたったのではなく、引用書的一致などから『紫家七論』を参照していたのではないかと推量される。

*3 長保三年／一〇〇三年

*4 上東門院／藤原道長の娘で、一条天皇の皇后。藤原彰子。

*5 寛治四年／本文には、(自筆稿本も) こう記されているが、寛治四年(一〇九〇年)では年代が合わない。寛弘四年(一〇〇七年)の誤りであろう。

* 6 楽府／『白氏文集』によってわが国で大いに読まれた『新楽府』のこと。

* 7 御堂関白道長公／藤原道長。平安時代中期の廷臣。兼家の第五子。御堂関白・法成寺入道前関白太政大臣と称されるが、正式には関白でなく内覧の宣旨を得たのみ。法成寺摂政とも。藤原氏全盛時代の氏長者。長女彰子は一条天皇の皇后となって後一条・後朱雀両天皇を生んだ。自筆本の日記「御堂関白記」が伝わる。

* 8 寡ながら／寡婦（独り身）であるという状態のままで。

* 9 式部の日記／『紫式部日記』。以下、四首の歌の贈答を含む記述は、この『紫式部日記』に載る。また安藤為章『紫家七論』にも引用される。

* 10 寛弘六年／一〇〇九年。『紫式部日記』では年次不明の記事であるが、『河海抄』などではこの年とする。

* 11 名にし立てれば／評判である。「すきもの」との歌は道長が紫式部に送った歌。

* 12 人にまだ／紫式部の返歌。道長の歌のことば（折る、すきもの）を巧みに利用しつつ、返歌する。くちならしけん／しじゅう言っているのだろうか。「もちろん誰もそんなことを言っていない」という意を込める。「すきもの」の「酸い（すっぱい）」をうけて、「口馴らす」に「（酸っぱくて）口を鳴らす」ということを掛けているという説もある。

* 14 よもすがら／一晩中 この歌は、道長の歌。次の紫式部の歌と合わせ、『新勅撰和歌集』に採られている。（恋五、一〇一九、一〇二〇）

* 15 たゞならじとばかり／紫式部の返歌「ただごとではあるまい」～とばかり（と言うだけ）と「戸ばかり叩く」、つまり引用の「と」と「戸」の掛詞。

* 16 さて紫式部といふ名の事は／以下、紫式部の呼び名や日本紀の局と呼ばれたことなどの記述は、前掲の『源氏物語』の注釈書『河海抄』やそれを引用して論を展開する安藤為章の『紫家七論』などに見られる。

* 17 藤式部／藤原氏の式部（女官の呼び名）。

* 18 紫の上／『源氏物語』に登場する光源氏の妻のひとり。一般的に光源氏に次ぐ主要な人物であると認識されている。光源氏が理想的な女性となるよう教育した。葵の上が亡くなった後、光源氏と契り、正妻格となった。

* 19 和漢の旧記／旧記とは、昔のことを記したもののことで、ここでは記録や歴史書のことを言うのであろう。

* 20 千載集／『千載和歌集』。以下の詞書と紫式部の歌は、巻十六・雑歌上・九七七番の歌。第二句「蓬が中の」。歌意は、宮仕えを辞めて里に戻ったところ、同僚だった女房から手紙が来たことへの謝意を表す。「露繁き蓬がもと」は、手入れをしていない庭の様子とともに、夫とも死別したうえに、宮仕えもやめた寂しくて涙がちな状況を表している。露は「涙」を暗示する。また「虫の音」は箏の音を暗示しているよう。

* 21 事書／和歌の詠まれた状況を説明する詞書のこと。

* 22 日記の中に／以下の記述は、『紫式部日記』に載る。次のような内容である。箏の琴、和琴を調律しながら、気をつけて「雨が降ると、湿気が多く弦が緩むのを防ぐために琴柱を倒しておきなさい」と申すまでもないままに（塵が積もって厨子にたてかけているほど、寂しく過ごしています）などと書かれている。

* 23 長保三年／一〇〇一年。

* 24 無名抄の説／『無名抄』はふつうは鴨長明の歌学書のことであるが、以下の記述は確認できない。『百人一首一夕話』の当該歌の挿絵中にも同じく『無名抄』を引用するが、その記事も同様である。ともに『無名草子』（鎌倉時代初期成立の評論）には、記事が確認されることから、『無名草子』の

誤りであると思われる。ここでは上東門院が『源氏物語』を書かせたことになっているが、『百人一首一夕話』は「覚束ない説」としている。

*25 さてまた石山の観音に祈請して／源氏物語』が、須磨・明石の巻から起筆されたという説は、前掲の『河海抄』や『紫家七論』などに載る。

*26 源氏物語を好色の書のやうに思ふ／以下の安藤為章など『源氏物語』に言及する多くの書に伺えること。そもそも『源氏物語』は光源氏の女性遍歴が中心になっているわけであるから、「好色の書」とみられても仕方ないのだが、そういわれると、風俗を乱す書となり、読めなくなってしまうので、様々な理由付けをして、『源氏物語』を読んできた歴史がある。表面的に描かれることと、その内実は違うというのである。

*27 熊沢氏の孝経外伝或問／熊沢氏は、熊沢蕃山。江戸時代初期の陽明学者である。著作に『源氏外伝』『孝経外伝或問』などがあり、ここでは『孝経外伝或問』の説が引用されているように書かれているが『源氏外伝』にも窺える説。蕃山は陽明学者（儒学者）であったが、『源氏物語』を「礼樂及び人情世態を教化するための書」としてとした。

*28 綱ばかりを見てまことの錦を知らざる／「綱」は衣の上からかける薄い布。人は『源氏物語』の表面（綱）だけを見て、その本質（まことの錦）を知らないことを喩えている。先に述べたことを比喻を使ってわかりやすく説いた。

*29 朝飯に粥と強飯とを参る事／これは「末摘花」に出てくる場面であるが、「粥」も「強飯」も米であり、登場人物たちの質素な暮らしぶりが見て取れる。質素で清美な生活を描くことも、『源氏物語』の主題のひとつとしてとらえている。

*30 竹の伝／糸は琴・三味線など弦楽器、竹は笛・笙など管楽器の類をいうことから、楽器の総称。楽器の秘曲についても、いまでは『源氏物語』にしか伝わらないものもあり、これらを伝承するのも『源氏物語』の主題のひとつとする。

*31 紫式部の女一人あり／冒頭に紫式部には娘が二人いることが記されていたが、ここではそのうちの一人が、という意味か。賢子は大式三位のこと。

*32 狭衣／『狭衣物語』。紫式部の娘である大式三位を作者とする説もあったが、現代では否定されている。

【注】 作成：西田正宏（大坂公立大学教授）

【参考文献】

Murasaki Shikibu: her diary and poetic memoirs. Translated by Richard Bowring. (Princeton Library of Asian Translations). Princeton University Press, 1982.

The Diary of Lady Murasaki. Translated by Richard Bowring. (Penguin Classics). Penguin Books, 2005 (corrected edition).